

編 上行文・中編 平行文・下編 下行文に分かれ、詳文・駁文・稟・状、咨・移会・移・関牒、牌・票・札・示の文例がそれぞれ数件掲載されている。

掲載される文例には、原文書の体裁、及び固有名詞・用語の注釈がつけられており、有益である。また句読点が編著者によってふられているが、引用符・疑問符等の他の標点は最小限にとどめられている。さらに各編の末尾には、通論として、清朝時代の文書行政を理解するために不可欠な基礎知識が掲載されている。なかでも、第2編の通論3の「公文中的交代詞」では、独特の言い回し方（「為…事」「等因」「蒙此」「前来」「准此」「為此」「理合呈請」等）について丁寧に説明が付けられているおり、文書読解のために、極めて有益である。文書史料を用いた清朝史研究を志すものの必読の書となるであろう。（楠木 賢道）

楊珍著『康熙皇帝一家』

著者楊珍氏は中国社会科学院歴史研究所の明進史研究室で研究に従事している新進気鋭の士である。本書『康熙皇帝一家』（B6版、438ページ、1994年10月、北京・学苑出版社）の表紙には、この書名の左傍に満洲文字で`elhe taifin hûwangdi i boo`（康熙皇帝の家族）と記されている。すなわち満漢合璧の体裁である。「前言」によれば、著者は1983年以来10年にわたって資料の収集に努めたとのことであるが、実録、起居注をはじめ多くの漢文文献や宣教師の著書等の他に、特に新出の満文檔案を博搜しているのが注目される。全編9章より成り、第1章は康熙帝の父の順治帝と生母の孝康章皇后、第2章は祖母の孝莊文皇后、第3章は嫡母の孝惠章皇后、第4章は后妃、第5章は皇子、第6章は公主、第7章は兄弟と侄、第8章は外戚について述べ、第9章は元来孝莊文皇后の侍女の蒙古人で、康熙帝や皇子等の輔導に当たった蘇麻喇姑なる人物について記している。以上の如く、康熙帝の多くの后妃及び親族姻戚の諸人物と帝との係わりを詳述すると共に、その背景の清朝政治史や宮廷史についてもよく触れている。康熙帝の家族関係全般についてこれほど詳細に研究したものは他に類がなく、ユニークな書物である。

（神田 信夫）